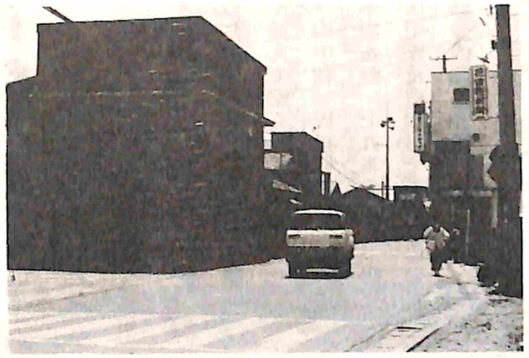
ウイスコン大学に入学し在学中は小学同期の木立イセや須崎梅太郎、原田男茶、鳴海繁四郎、秋元市五郎などに時々アメリカからお便りを呉れたと言う。利一氏はウイスコシン大学を苦学して卒業し昭和五年イギリス、イタリヤ等を経て帰国。帰国后は「やまと」新聞記者　総務部長社長を務め、この間に自然天下国家を談論風発する政治家やボクシング界が好きになり、壮士の集っている政党の院内外の仲間入りし偉方達と交友し始め、日本の最右翼の巨頭、頭山満翁の信頼を得て大川周明・北一輝・藤山雷太などとも親交が厚く共に情熱を燃やし、同志との交友は本人（利一氏）の人望と努力に依る物であると思う。



生家角屋敷＝鍛　町分岐点

又、昭和初期、岡田啓介内閣は解散、総選挙があり当時中央で重きをなしていた工藤十三雄氏を当選させた。

又、昭和五年には実弟の山中利行をボクシング修業の為にアメリカへ渡らせたが数ケ月後、利一氏も私用の為に渡米、在米中の或る日でした、利一氏は人通りも薄い夕暮のニューヨーク波止場を一人で散策しておると手前から泥酔気味の大男の黒人数人が、利一氏を取り囲み無理難題を吹きかけた。激怒した利一氏は遂に堪忍袋の緒が切れ寄って集る黒人数人を次々と海へ投げ飛ばし通行人は足を止めて観ており喝采を浴びたと言う武勇的なエピソードもあった。

又、昭和六年の秋には東京都京橋区に日米挙闘倶楽部を創設し、会長理事として日米スポーツの交流に貢献する願いを叶え、弟利行を昭和七年に帰国させ東京ウイルター級チャンピオンに迄のし上げ、又、青森県出身の能谷二郎・綱野松雄・山中利行ら日本の一流選手を育て上げ、田辺宇英氏の主宰する、帝国挙闘倶楽部に対抗するまでの実績を上げ、日本ボクシング界の初期を飾り全国に山中利一氏の名声を轟かせた。

又、昭和九年東奥日報一万五千部記念行事として竹内俊吉事業部長と共に青森県初の国際プロボクシング試合を青森・弘前で開催し、本県出身の能谷二郎・綱野松雄選手等が比国の強豪を相手に白熱し好試合を展開した事は、本県ボクシング界史上のビッグエベントとして語りつがれている。

利一氏は「やまと新聞時代や日米挙闘倶楽部創立当初から」本県出身者の面倒を良く見てスポーツ界だけで無く芸術家や政治家をも育て、その中には世界的に知られた版画家の棟方志功や三和精一氏等があるが山中利一氏は嘉瀬出身の（在京当時）小山内漫遊・黒川由吉・須崎（アンタリ）等を自分の弟の様に可愛がり良く面倒を見たと言うが、小山内漫遊とは水魚の中の友であり、酒を呑み交しては二人で生れ故郷の少年の頃を追懐し、利一氏が漫遊に語りかけた話しは、少年の頃を追想しながら、野山や（観音山）小川を心の向く儘に駆け廻った事や、楽しかった運動会、幾度か蛍の光で上級生を送り「仰げば尊し吾が師の恩……」と涙ながらに数々の思い出を語り、故郷は所謂、人生の原点であり、そ



して母校は優しく又、厳しくやさしい父母にも似て何時も心に安らぎと気を与えてくれる。少年の頃の私は何時も風光明媚な観音山で自由奔走に遊び廻り、小さい頃からの私は無上の幸せと今でも想っており故郷は、心から離れない「おふくろ」であると語り合って居る間に西の空が、かすかに明るくなり夜が明けて来たと言う。

昭和十一～二年頃、杉山金造氏の村長時代だった。或る日、嘉瀬村役場に突然、けたたましい電話のベルが鳴り響き、受話機を受取った職員に杉山村長はおるか、と話され「ハイ」居ります、と言うと『私は山中利一だ　いま青森の芝楽（老舗）」におる。至急、杉山村長に「芝楽」に来いと言う電話。杉山村長は何事が起きたのかと時計を見ると午后三時、杉山村長は至急、ハイヤーを呼び青森芝楽へ直行「芝楽」に着くと案内された大広間の両側には其男や若い風強な人々が二列に座っており、大男達は杉山村長を見ると御苦労様ですと一同は頭を下げる、見ると利一氏は床の間の真中にどっかりと座っており、杉山村長を見ると『おー来たか、さあー、さあー此に座れ』と言い床の間の利一の隣りに座ると利一六はこの人は俺らが村の村長だと紹介したのも良いが、芸者数人を呼び五十人位はおると思う「宴」に、二の膳を上げ「ドンチャン騒ぎ」杉山村長は憶測で、もしや「芝楽」の今晩の座敷の費用を全物、私に負担させるのでは無いかと、酒を呑む心地も無く内心「びくびく」し、宴会から逃げるにも逃げられず時間の回るのを待つ外か無く、時計を見ると夜の一〇時を回った瞬間、利一氏は皆の衆、俺が村の村長のお帰りだ……車を呼べと命令し杉山村長に屈強そうな若者の付添いを三人も付け青森の某旅館まで送ったと言う。芝楽の宴会の費用は勿論、車代、旅館代も杉山村長には一銭も支払わせず、山中利一氏が全額支払ったと言う。

嘉瀬村役場へ帰った杉山村長は青森「芝楽」で呑んだ時は冷汗が、たらたら流れ生きた心地が無かったと言い。反面、流石は男の中の男だと褒め讃えたと言うエピソード的な笑話があります。

津軽の最北端。名も無い、一寒村から上京した山中利一氏の生涯は波乱万丈、一世を風靡したが人間の運命には勝てず、昭和拾五年二月二十日病魔におかされ、東京都杉並区の自宅で四十四歳と言う若さで逝去された。　刎頸の交りをした小山内漫遊（嘉七郎＝嘉瀬出身）は戦后の食糧難時代に生れ故郷に帰り、利一少年が大好きであった嘉瀬観音山に籠り、地元で仙人と自称しながら山中利一氏を何時何時迄も嘉瀬の人々の記憶に残したいと、利一氏の追憶を込め喜良市（金木町）の仏師、小山

**書翰　②**

青森県北津軽郡嘉瀬村木立いせ子様
級友一同に宣しく

私は米国に於てロンドンに参ります。種々なところを見て、せめて此の私の鼻をたらしてゐた小学校友達に知らせてやりたいと思ってゐます。

何時も子供だと思ってゐたのに、すでに三十幾才になった。昔の学校の事がたゞくく懐しい。確か女の友達は、貴女の『いさ』がいた。『蛸島』なんとか、『八五郎』とこの娘、男には『十造』『梅太郎』『熊公』『繁四郎』『鉄』、今はどうしてどこにゐるやら。

私は東京に帰るのはパリ・ロンドン・イタリヤを通って暮には帰る。皆体を大切にして下さい。

（大正九年）
一九二〇年十月十九日
ベルリンにて　山中利一

内晴夫氏に木像を彫ってもらい、利一少年が大好だった観音山の観音堂に木像を寄進、安置し。日夜、利一氏の供養をした漫遊は昭和五三年三月二十日、観音堂内の山中利一氏の木像の前で永眠し此の世を去りました。

## ＝私と角の利一 ①＝
# 写　真

昭和六年日米挙闘クラブを創立した山中利一氏の写真が私の家にあり、母からこれが日本ではじめて挙闘クラブをつくった『カドの利一だよ。』と聞かされた事を記憶している。

私が小学生の頃、どういうわけか山中利一氏の写真が私の家にあり、母からこれが日本ではじめて挙闘クラブをつくった『カドの利一だよ。』と聞かされた事を記憶している。

いろいろ調べてみたら、私の叔母木立イセと利一氏は小学校の同級生であり、利一氏が東京へ移り住んだ後、村へ帰ってくれば私の伯父である外崎男茶の家へ来て、村の友人達と歓談したものだという事を耳にしている。私の母いさも木立イセも外崎男茶の妹であり、そのような関係から私の家にも利一氏の写真があったのかも知れない。だが、今になってみれば、その写真も探してみたが見当らない。

＝山中正津＝

## ＝私と角（カド）の利一 ②＝
# 信（のぶ）　礼（れ）

山中信礼の屋号は、『カド』と云う名が冠されていた、だからカドの『信礼（のぶれ）』で、その名が通っていた。昔、本町から車町の一帯にかけて広大なカド屋敷に住っていたからの家号と聞かされている。由緒ある山中家では、信礼さんの小年期に畑中の町内に住んでいた一時期があった。

信礼さんは、私と同じ大正十二年亥年生れの、同じ町内だものだから、今で云う竹馬の友で、よく一諸に野に遊び、川で泳いだ仲であった。

山中家では、代々伝えられてきたものであろう、槍や刀があったもので、黒塗の柄の長槍は、長押（ナゲシ）に掛けられていて、よく見せてもらったものだった。

小学校二年生ごろだったと思うが、偉い人のお話があるからと全校生徒が、体操場に集められたことがある。その時の人は山中利一氏であった。あとで知ったことだが、山中信礼さんの家の人だと聞いて、子供心にも誇らしく思ったものである。

その後、小学校の体操場の教壇の北側に『遠山満』揮毫の掲額が掛けられてあったが、山中利一氏寄贈のものに違いない。肝っ玉が太く、抱

## ＝私と角（カド）の利一 ③＝
# 形見の時計

昭和8年11月15日、卅六才で父が死ぬとき、父が大切にしていた懐中時計を見て、「今、午后三時十六分か、もう駄目だ、子供達を頼む」と呟やいて目を閉じたと云う。八才の私を頭に男の子四人を残された母の言葉である。

その懐中時計は、ウオルサムの銀時計で、縄になった白い色の鎖がついていて、赤銅色の大きなメダルと繋っていた。そのメダルは、ブルドックの貌の図柄だった。

敗戦後、昭和廿一年頃だと思う。廿一才の私は、腕時計が欲しかったが、経済的にも腕時計を買う余裕がなく、若者の持物らしくない父の形見の懐中時計を持ち歩いていたのだが、ついに意を決し、五所川原の森時計店と云う時計店に行き、懐中時計と腕時計の交換を申し入れた。時計店の主は慎重に懐中時計を見てから、私の好きな腕時計を選ばせ、交換してくれた。その時の腕時計の値段は忘れたが、値段も高価で品質も私には満足したものだった。何ケ月後腕時計がついに母の目にふれ、母に腕時計の購入方法を糺され、懐中時計との交換を白状させられた。母は怒りの声より悲しみの声で、

腕時計が欲しくて交換したのは仕方がないが、なぜ事前に一言云ってくれなかったか、形見と云うものは、その品物の高い安いに拘らず、その家、家族にはどんなに大切なものか、特に懐中時計に付いていた赤銅色のメダルは、父と同級生で父と大変仲のよかったカドの山中利一と云う偉い人が、大学の相撲大会で優賞し、記念に貰らったメダルを海軍にいたとき、父が利一さんから譲られ大切にしていたものだと聞かされた。

その話を母から聞いたので早速く、くだんの時計店へ行ったが、何ケ月も経ていたので、もう他人の手に渡ってしまった後だった。その時から山中利一さんと云う人のイメージが残り、嘉瀬の老年の人に問い質すと、聞かれた全部の人が、山中利一さんを賞めない人が無く、ともかく傑出した人物である事がわかった。嘉瀬の誇りであろう。

それにつけても、若さの失敗、懐中時計イコール、メダルの消失は、残念で今更乍ら後悔の念に絶えない。

因みに嘉瀬小学校百年史の卒業生名簿を繰って見た。明治四十年度卒業六十名、明治四十二年度卒業三十四名と二回も出ているなかに、山中利一が筆頭に出ていた。昔は成績順であるので小学校も勿論一番である。その中に同級生として私の父の名も連っていた。母の云った通りである。

× × × × ×

カドの家とは苫小牧に居る沢田政吉叔父の妻キミエさんとの関係で、現在は親類になっているのも、メダルに繋がる縁でもあろうか・・・・・

＝沢田　薫＝

## ＝日本プロボクシング事始め＝

# 新興スポーツ

県立図書館へ何回か通い、利一氏について記事を探した。そして昭和六年一月二十一日付け東奥日報夕刊に掲載された記事を見つけたので次に掲げる。

**新興スポーツの日本の挙闘界は**
**本県人の手で　指導されつゝある**
**◇人気選手は殆ど本県人◇**

新興スポーアとして我が国に於けるボクシングは、一九三〇年より一九三一年に亘ってぼつ然と人気の渦巻を起しているが、強い刺激へと変ってゆく近代人の、刺激欲求心は、遂に挙をもって、リング内に鮮血も勇しく戦う野性美にこそ、近代人が求めるスポーツ的刺激が存在すると在って、十六日東京日比谷公会堂に於ける、日米挙闘クラブ主催大会には、内外人の男女が殺到した。

ゴングの響くところ、　の如きボクサーが、新興スポーツの人気を背負って、今や我が国のボクシングは、余りにも鮮やかな人気の濁流にのっていると言はなければならないが、サテ最近の我が挙闘（学生を除く）を展望して見ると、帝都にその人気を集めている有名選手は、殆んど青森県と、東北からの出身である。

去る十六日新帰朝者臼田選手と戦う事になって、遂に臼田選手の病気から模範試合を行ったウエルター級の〇〇熊谷選手は本県出身、さきに小泉逓相カップ争奪挙闘大会に優勝を綱野松雄と争い、遂に逓相カップを獲得した山内武雄選手は北郡相内村出身、更に十六の〇〇戦に於て、山内を破った綱野は西郡鰺ケ沢出身である。この他今米国に居る山中利一氏令弟利定氏も〇〇たるものであり、澤本不二選手も〇〇出身である。

また本邦職業挙闘クラブとして唯一の日米挙闘クラブ主宰者は本県北郡出身の山中利一氏である。してみれば、若し全日本府県対抗挙闘試合が開かれるならば断然青森県に及ぶものがなく、わが国挙闘界は青森県を主力とする東北人によって目下支配され、指導されつつある状態と言って良い。

## プロボク青森大会

昭和六年一月十六日東京日比谷公会堂で近代スポーツの花形プロボクシング大会を主催した嘉瀬出身の山中利一氏（日米挙闘クラブ会長）は、昭和九年郷里青森県の弘前市と青森市でプロボクシング大会を開いている。当時の新聞をひろってみると。

昭和九年六月、東奥日報社の主催で、東奥日報一万五千部記念行事として、『日比対抗挙闘大会』を、青森市は十六日午後六時から、歌舞伎座に於て、十七日は弘前市弘前座で開催しているが、山中利一氏はプロボクシングのプロモーターとして、この大会の運営に当っている。

ちなみに、当時の大会入場料は、特別席一・五〇銭（前売一・三〇銭）指定席一・二〇銭（前売一・〇〇銭）、一般席八〇銭（前売六〇銭）となっている。

＝山中正津＝



嘉瀬八幡宮境内に鎮座奉祠せる人丸神石碑に寄せて

# 柿本人麻呂の伝記（中編）

## 五、人麻呂の官位

人麻呂が石見で臨死時自傷作歌という詞書の中に『死』の文字があるので、大　喪葬令に依ると六位以下の者に対しては「死」を称するとあることから、人麻呂は以下の下級官史であった証拠である。契沖、真の国学の大宗も之を肯定していたので、それ以来、どの国学者もそれを認めて異論ないようである。そして始めは舎人（とねりと読む。上代、天皇または皇族などに近侍して雑事を掌ったもので、摂関以上の人臣も、天皇より之を賜われば傭うことが出来る。任務としては牛車（ぎっしゃ）の牛飼または乗馬の口取りなどをする下役の者のことである。金人にも階級があり、大金人、小金人あり、金人の長官始め八階級に分かれているという。天皇には大金人が仕え、その人数は長官以下八百人を擁するのに対し、東宮には長官以下六百人を擁するのが定員となっているという。人麻呂も始めは身分低い金人として仕官したが、金人の中にも必ず作歌に興味を持ち、その能力ある者もいたに違いなく、それらの人々はいつの間にか人麻呂の作歌能力の抜群振りを知り得て、これに師事する人々が多数に上ぼり、それが噂となって、皇子や天皇に供奉して、歌を代作したり、又人麻呂自（みずか）らの名で作歌を献上する役目に取立てられる機会に恵まれるように昇進したのは此の上ないことである。併し官職は金人のまま十数年も続いたというが、遂には地方官として始めて「石見」の国の国府の役人の一人として赴任することになったのである。「石見の国司（長官）となったのではなく属官となってである。

## 六、人麻呂の日常生活及び其の他

人麿呂の公人としては他の官人達と同様に朝に自宅より出勤し、夕方帰宅するという一日を繰り返すことは、特記すべきまでもないことである。

併し私人として実際の生活を考えて見ることも、当時とは著しい相違あることを考えて見ることも、多少は興味あることと思われる次第である。人麻呂も矢張り米を主食として居たに違いない。米と言っても現今とは大違いで、玄米を甑（こしき）（蒸籠）で蒸して飯にするのだから、強飯（こわめし）で、当津軽地方では『フカシ』といえばよく分かるそのもののように強飯のことである。その他の穀類には、麦・粟・稗・黍（きび）・豆等があり、それ等

を蒸したり、焼いたりして食ったに違いない。又、餅も食ったと想像される。味噌も醤油も副食の味付けに使ったというが、現今、吾吾が用いているもののように美味でないことは言わずもがなである。薇菜には、号、胡瓜、芹、蔓菜、莖立、嫁菜、茸、萬苣（今のレタス）、冬薯蕷、蓴菜、菱、蓮根、蒜、蕨、蓬、薇などの野菜は勿論のこと、果物には梅、桃、栗、杏、橘、梨、柘、棗等の記載がある。それから当時の人々も魚肉をも食った。魚介類には鱈、鯛、蛯、忘貝、鱸、鮪（まぐろの別名）鮑、氷魚、蟹、蜆貝、鮒等があり、海草類には岩海苔、海松、昆布、藻等がある。

それから鳥獣の肉があった。鳥には雞、鶉、鴨、鴎、雁、雉、鴫、白鷺、鸛、鶴、百舌鳥、鷹等があり、獣には鹿、　、熊、兎、猿などが居る。併し人麻呂程度の生活では、その全部をいつでも手に入れたか疑わしい所もある。尚、調味料としては生姜、山椒、橘等があった。

酒には白酒、黒酒がある。けれどもこれも満足に飲める身分ではないであろう。水は谷川の水を飲み、又泉の湧いたのを飲んだだろう。走井、堤井の水をも飲んだという。人麻呂が仕官するまでは謂ゆる萱か草葺きの生に生長しただろうから、褥（寝所）も麻衾をかつぎ、木枕を使ったと思う。厠は普通川流の上に造ってあった。当時の浴は今の行水が多かった。温泉などへ行っても極めて原始的であった。灯火も貴族でも土器に油を入れて点ずるに過ぎなく、庭火、或いは炬火を用いたらしいから、今の電灯生活から見ると余りに隔世の感に堪えない次第である。

それから人麻呂は旅をするのに、従歩或いは馬に乗り、河は渡舟に乗ったらしい。近江から上京の際に河のほとりで作歌しているが、この時は恐らく従歩であったろう。石見から妻に　れて上京するには馬に乗っていた。この馬は駅馬・伝馬を利用したらしいから、人麻呂はそのあたり石見国府の官史であったか、一時派遣の官史であったか、兎に角官史であったろうと考えて間違いはないと思われる。国府の官史とすれば、江ノ川をも舟で遡ったこともあっただろう。そうすれば、終焉の地といわれる鴨山が神村よりももっと離れていることも亦可能であり、徒歩で出張などしたとしても亦可能である。人麻呂が瀬戸内海を船で往き帰りしているが船は海岸の近くを進んで居ることが歌の上によくあらわれていることがわかる。また船の進みも遅いものであったことも推測するに難くはない。

## 七、人麻呂の年令

### (1) 人麻呂の年令の諸説

#### (イ) 加茂真淵の説

人麻呂の年令も殆ど全く不明である。併し41代持統天皇三年に日並皇子の殯宮（本葬以前に御柩を仮の宮処に安置している間の場所）の時の歌が万葉に見えた年次明記の最初だとして、その年令も大体見当がつくし、歿年が大体43年代元明天皇の和銅三年で、寧楽遷都の以前であることが先ず動かぬ事実と看て人麻呂の年令もそんなに長寿を得たとは考えられない。

(1)最も有力な説として賀茂真　は41代持統天皇の元年二十二・三才だろうとし、生誕は38代天皇の御代に違いないとしている。これには江戸時代末期の国学者関谷真可　氏始め多くの学者が、真　説に従っている。



#### (ロ) 岡田正美氏の説

人麻呂の出仕は「舎人」という低い身分で出仕し、やがて草壁皇子（天武天皇の皇子で母は鵜野讃良皇女で天智天皇の第二皇女。後に41代持統天皇となる）持統天皇の元年に草壁皇子は皇太子となって母の持統天皇を助ける第一人者となった。人麻呂にとっても、非常に栄誉の身分となったわけである。「舎人」に出仕するには、年令二十五才以上という定めがあるから、持統元年に人麻呂が二十五・六才とすれば、これを逆算して人麻呂は38代天智天皇の初年頃に生まれており、その死が和銅二年に四十八才か四十九才で死んだことになる。この岡田正美の説は真淵説よりも、遥に正確であるという。

#### (ハ) 岡熊臣説及び樋口功説

岡熊臣（江戸後期の国学者。（天明三年～嘉永四年）も大体真淵説に従い、樋口功氏も大体右に拠り、「日並皇を殯宮の時の作歌時が二六、七才の頃と見るあたり、岡熊臣回講している。

#### (ニ) 人麻呂の歿年を慶雲四年とする想像説

慶雲四年は疫病全国に流行したので、人麻呂もそれに罹病しただろうとの想像説に依れば（七〇四）であることより、和銅二年（七〇九）よりも、五年間も若死にの四十三才か四十四才で死んだことになる。これは若過ぎて誰も信じないでしょう。

#### (ホ) 梅原猛氏の説

梅原氏は人麻呂の死因の究明には非常に精力を費し、二冊の大著として世に問い、大反響を起こしているが、死歿の年令には何才頃とも明示していないのが、非「画竜点睛」の憾みなきを得ません

#### (ヘ) その他人麻呂の歿年

① 国史実録では六十二・三才から六十七・八才とするもの。

② 人麻呂秘講抄には四十二才で歿したとある。

③ 石田春律は「石見八重葎」という著作で八十八才まで長寿を保ったとある。

④ 「閑窓一得」という書に「人麻呂、生死知れざれども、大同二年八月二十二日石見の国にて死す。年八十四才なり。とある。

⑤ これらの長命説はどれも「判官贔屓」の一つで義経が平泉で死なずして奥州へ下り、方々で暮し、三厩に「義経寺」まであるほか、蝦夷の国へ渡り、遂には大陸にまで渡って、「成吉思汗」となった話と同巧の部類かも知れません。尚、申すが、「成吉思汗」は世界史では蒙古を征服して後の「元国」の大祖となり「必比烈」はその孫で、南下して支邦を統一し、更に欧州中部までの支那始まって以来の欧・亜二州に誇る。領有したのは支那史上始めてのことであるのは言わずもがなである。

## (一) 長歌と短歌の盛衰・消長の歴史

### (イ) 長歌と短歌の盛長・消長の歴史

長歌と短歌と、孰れが先に出来たかということはちょっとむずかしい問題である。併し記紀（古事記と日本書紀とを一つにした略熟語）の外に「琴歌集」及び残部五種しかない「風土記」を調べて見ても、民謡や長歌が圧倒的に多く、短歌は至って少ないのである。短歌の創始者は皆人の知る「素戔嗚尊」である。素戔嗚尊は韓国へ渡るべく出雲地方へ差掛ると、思いがけなく「八岐大蛇」事件にかかわり、退治に依って危き

を救われた老父婦の最後の娘「櫛名田姫」の献上を受け、婚儀を行うための土地探しにかかった。「須賀」という土地に至った時に「此処に来て私の心は実にすがすがしくなったという感慨を洩らしたので、其処に宮殿を作って住むことになったことから、今でも「須賀」という所があるという。須賀の宮を築造中、白い雲が幾重にも立ちのぼる様が眺められた。その幾重にも立ちのぼる雲を見て、素戔嗚命は史上創めて、

八雲立つ　出雲八重垣
つまごみに　八重垣作る
その八重垣を

という短歌（和歌の一種）を作った次第である。幾重にも幾重にも雲は立つ。その名も出雲の国に雲は立ち、八重の玉垣のように私の宮殿の周りを囲んでいる。私はいま美しい妻を得て、周囲を玉垣に囲まれた中の宮殿で暮すことこそ絶頂だといい、妻「櫛名田姫」の老父「足名椎の神」を召して、「お前は私の宮殿の首長となれ」とこう命じ、「稲田宮主須賀之八耳神」という名を与えたという。

爾来、短歌も次第に発達するようになったが、記紀に記載されているのは極少数で数える程しかないが、長歌は民謡と共に至る所に見え、本文程ではないが数え切れない程である。

つまり記紀の歌は長歌が主で、短歌は客である。これが万葉へ入ると、反対に、短歌が主で長歌が客となってしまった。

奈良遷都以前は、長歌はまだ盛んで、短歌に圧しられている程ではなく、衰微の風が見えるだけである。遷都後になると、衰微しかけたものは益々衰微の一途を辿り、新に擡頭したものは次第に盛運となって、長歌はあるにはあるが、雄大作がなく、或特別の場合、又は心から作られるだけのものとなってしまった。

前述の人麻呂の年令の項目で薄々触れてはいたが、人麻呂は持統・文武両朝に亘って生きていた人である。奈良遷都すぐ前の藤原朝の人である。これを歌の上から言えば、力量多い作者が一時に輩出して、前にもなく、後にも稀な盛観を呈した時である。これを歌の形式から見れば、従来の長歌に、新風の短歌が加わって来て、そして短歌が勢力を得始めた時だと見える。

更に思われるのは、この藤原朝（持統・文武・元明の三代十六年間、奈良県高市郡八木町の東南方、大和三山に囲まれた地域で政治を行なった三代十六年間の　）。はそれにつづく奈良朝（43代元明天皇以降七代七十余年間（七一〇　七八四）奈良に都した時代をいい、その最盛時は、45代聖武天皇の　平年間である）の盛世をまだ見ざる夢として孕み、且あこがれていた時である。実際に奈良の時代になっての盛世を余すところ歌い上げた次の歌で、そのあこがれも単なる夢想でなかったことが推察出来ようというものである。

「万葉集」第三巻に
太宰少弐小野老朝臣歌一首

三二八番　青丹吉　寧楽乃京師者　咲花乃　薫如　今盛有
（あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今盛りなり）

此の歌の意味する奈良の都の盛世は、日本史上、前古未曽有とも言うべきものであった。

又、同じ「万葉集」に、
六年甲戌海犬養宿禰岡麿雁召歌一首

九九六番　御民吾　生有験在　天地之　栄時爾　相楽念者



（み民吾生けるしるしあり天地の栄ゆる時に会へらく思へば）

との歌に詠まれたがように、盛世に生まれ会わせた幸福に唯々随喜渇仰涙を流し、又一方、仏教の発祥地には勿論、その伝　国中国及び朝鮮半島にも見られない程巨大を奈良の都に鋳造して、仏教諸国民を驚愕させた外、我が国威を大いに諸外国に発揮したことに依り、全国民もその国家意識の誇示することに絶大なものであったのである。一方この仏教に依る盛世の前から、歌の盛になったのも、恐らくは、この盛世へのあこがれからである。そしてその歌も、新風である「短歌という方向へ向かっていたのである。

新風は新風なるが故に魅力を持ち、古風は古風なるが故にいつの間にか忘れ去られて行くのは、何時の世にも通じてのことである。万葉集巻一の「藤原宮之役立民作歌（役立民とは人民に課せられた人夫役のこと。これは長歌になって番号は五二である。（御井歌の意は今は滋賀県大津市園城寺にある湧水のことで昔、天智、天武、持統の三天皇の御産湯の水を汲んだ井戸があった所から別名、「三井寺」ともいう。天武天皇の時代、三井寺は弘文天皇の皇子与多王の創建に成るという。この「御井歌」も万葉集の中でも雄大編である。であるにも拘らず、それが作歌者の名が伝わっていないのである。どれも雄編なのに無名扱いが種々の関心を呼ぶ。それには他の理由もあるのではあろうが、それが長歌であるが故に「長歌」は閑却されがかっていた為と思われる第一の理由である。上に述べた二つの無名作家の「長歌」も枕詞や天皇国史観を中心思想としているあたり土屋文明氏は作歌者は柿本人麻呂であろうと見当を付けている。

此の間に処して、我が柿本人麻呂は、既に新風の「短歌」を作っていた人である。それが一方では古風の「長歌をも作っている。思いの籠もたと思うものは殆ど皆「長歌としているのである。

何故に彼「人麻呂」は長歌を作っただろうかということは、これだけでも問題とするに足りる十分の根拠がある。

## (二) 短歌の連作

当時既に、今日いうところの短歌の連作が工夫されていた。例示した方が便利だから例示することとする。最も適当したものが「万葉集」巻一の巻首にある。

盤姫皇后天皇　御作歌四首

八五　君が行くけ長くなりぬ山たづの迎へか行かむ待ちに行かむ
八六　かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根し巻きて死なましものを
八七　在りつつも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜の置くまでに
八八　秋の田の穂の上に霧らむ朝霞いづべの方に我が恋やまむ

天皇は仁徳天皇である。磐姫皇后は　深く且つ勢力を持っていられたところから、甚だしく天皇は御悩ませられたことが、記紀に、多くの歌に潤色されて伝えられている。右に例示したした短歌の連作を見ても、歌としては可成りの程度まで複雑しした内容を盛ることが出来る。一つの事件をその頂点頂点で捉えて、多くの空白を置いて作るのである。更によく見れば、丁度漢詩の絶句の「起・承・転・続」のように、首尾をつけ、変化をつけて、一つのきちんと纏まったものにしている。何から思いついたろうということは別として、兎に角、便利な形式を工夫したものである。この連作が万葉の撰者が認めたように、仁徳天皇の出現し